

# 石州流せきしゅうりゅうの成立とその特色

小田 守琮

石州流は片桐石州を流祖として、江戸時代初期に成立した草庵ちやの茶湯のゆである。

## 1 石州の略歴

石州は慶長10年(1605)片桐かつもと且元さだたかの弟貞隆せつりゅうの長男として摂津の国(大阪)茨木で生れた。13歳の時父に連れられて二代將軍秀忠に拝謁をゆるされ、武家の嫡子として認められている。

寛永元年、20歳の時石見守に任ぜられ、従五位下石見守貞俊じゅうごいのげいわみのかみさだとしとなる。3年後、父貞隆が亡くなったので父の遺領を受け継ぎ、小泉13,000石の大名となった。小泉城は現在の奈良県大和郡に城址が残っている。石州が小泉藩主になった頃の茶湯は小堀遠州こぼりえんしゅう(注1)の時代で、遠州は將軍家光の信任厚く古田織部ふるたおりべ(注2)没後の茶湯界のリーダーであった。遠州と石州はその経歴が類似しており、二人とも父の作事さくじ普請方ふしんがた(注3)を受け継いだ。遠州は江戸城普請を、石州は知恩院の修復に当たっている。知恩院はむかし家康が寺院再興に関わったことから、徳川家にとっては因縁の深い寺である。不幸にも寛永4年焼失し、その修復に石州が筆頭奉行として任命された。石州は弱冠29歳であった。知恩院の修復には9年の歳月を掛けているが、この9年間の滞京時代、石州にとって非常に有益な期間であった。綾小路通りに茶室を造り、そこに先輩の小堀遠州、姫宗和と謳われた金森宗和、学僧しょうかどうしやうじやう松花堂昭乗そうたん、千宗旦など茶人・文化人を招き交流を深めた。石州は若年より道安系どうあん(注4)の茶湯を桑山宗仙くわやまそうせんから習っている。無事に

知恩院の修復を終えて、一旦江戸に戻り賜暇（休暇）を得て自領の小泉で7年間の充電期間を送る。この間、当麻寺中之坊に茶室・庭園を造っている。現在慈光院茶室と共に国の重要文化財に指定されている。7年間の賜暇の後、再び出府した石州は充電期間で確立した石州茶湯の披露を始める。

慶安4年(1651)三代家光が他界し、長男家綱が四代将軍となった。その時家綱は僅か11歳であったため、家光の異母兄弟の保科正之がその補佐役となった。保科正之は石州茶湯の愛好者であり、彼自身も伝授を受けて会津怡溪派の基礎を造った。

寛文5年(1665)石州は将軍家綱に点前を披露し、将軍家の茶湯指南役としてその地位を確立する。古田織部・小堀遠州に続いて石州が四代将軍家綱の茶道指南役として登用されたのである。後見役保科正之の推挙があったと思われる。石州は61歳であった。石州は将軍の前で茶湯を披露した後に茶湯心得を懐紙に書いて上呈している。これが『石州三百カ条』である。

『石州三百カ条』は実技の基本教本であり、茶湯作法を細かく書き上げ「分相應の茶湯」に徹することを説いている。折しも武断政治が



点前をする著者

ら文治政治へと幕府の政治体制が変わろうとする時代であり、石州の  
 説く「分相應の茶湯」は秩序を重んじる文治政治の理想の茶道観とし  
 て受け入れられた。以後幕末までの二百余年、石州流が將軍家の指南  
 役を代々受け継いだ。江戸時代は武家社会であり、茶湯の中心も武家  
 であった。諸大名は政治も生活様式も將軍家を模範としたので、必然  
 的に將軍家の茶湯を諸大名も習うこととなった。このようにして石州  
 流は全国に急速に広まったのである。勿論、町衆の間でも連綿と町方  
 茶が続けられていた。石州の「分相應の茶湯」は権力者に都合のよい  
 茶道観であった。しかし、石州が権力にへつらったわけではない。織  
 部も遠州も「茶湯においてはみな平等」と説いたのに対し、石州は「平  
 等の中に差別あり」と説いた。宗二（注5）や利休（注6）と秀吉、  
 織部や遠州と徳川家、権力者と衝突し非業の死を遂げた先輩茶人を見  
 てきただけに、「分相應の茶湯」は石州の封建時代を生き抜く知恵だ  
 ったのかも知れない。しかし、「大名は大名らしく、武士は武士らし  
 く、人の真似をすることなく地位や身分・場所をわきまえて、それ相  
 應の礼節を大切にしてお自分の茶湯をやりなさい。」と説く石州の茶道  
 観は侘茶わびちゃを追い求めた石州独自の思想であり境涯であった。それがた  
 またまその時代に受け入れられたのである。

寛文10年66歳の時、石州は家督を三男貞房さだふさに譲り、幕府の役位も退  
 いた後しばらも暫く江戸に留まり、幕府要人・茶友・茶弟を招いた茶会を  
 頻繁ひんぱんに催している。この茶会は石州自ら提唱した「分相應の茶湯」の  
 実践の場でもあった。約60回の茶会をほとんど同じような道具立てで  
 催した。道具を誇示する大名茶でもなく「侘び」をことさらに強調す  
 る侘茶もどきでもなく、石州自身の「分相應の茶湯」の集大成であっ  
 た。親しい人々が相次いで他界する中、石州も老境に入り亡くなる1  
 年前に小泉に帰った。そして慈光院にじょうだいていしゅどこに二畳台目亭主床の茶室を造り茶  
 三昧の生活を送り、延宝元年11月69歳で没し大徳寺高林庵に葬られた。

## 2 石州の侘・寂

石州流は珠光じゆこう（注7）、紹鷗じょうおう（注8）、利休と引き継がれ確立されたいわゆる草庵茶湯である。石州が「侘・寂」の考究を推し進めて著した書に秘書『一畳半の傳』がある。台子の巾たいす はばを除いて一畳半とした茶室は茶室としては究極の空間である。そして珠光が侘茶の心を藤原定家の歌に託したように、石州もまた『一畳半の傳』に込めた自らの侘茶の心を同じ定家の歌に託して見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮れと述べている。また石州57歳の時に書かれた『侘びの文』では次のように述べている。【人の造りたる侘びはまことの侘びにあらず、天の造りたる侘びはまことの侘びなり。】人工のものでない自然の中にこそ本当のお茶があり、侘びがあるというのである。また、『宗関公自筆案詞』に石州は【茶の湯は侘びの体にて十分を嫌う故に常時七、八分の心にすれば自然と十分の心に叶かなうなり、道具にいたるまで十分でないことをよしとする。】また【さびたるはよし、さばしたるはあしき。】と述べている。

## 3 石州と禅

知恩院修復の時期、石州は大徳寺の玉室宗珀ぎよくしつそうはく（大徳寺147世）和尚に参禅し、和尚から与えられた『萬里一條の鉄』の公案で悟ったと伝えられている。「萬里一條の鉄」とは、余念をまじえず正念を「無限に続く一條の鉄」のように一貫相続する境涯である。『禅茶録』では、点茶てんちゃにおいてその初めから最後まで一貫して点茶に精神を集中させ、次々に点てることを「氣続点きぞくだて」と称し、これを「禅茶」の神髄としている。「萬里一條の鉄」は石州の参禅弁道の悟りの深さを窺うかがわせる。石州34歳の春であった。やがて、玉室和尚から「三叔宗関さんしゆくそうかん」の道号を賜り、大徳寺山内に塔頭たっちゅう（注9）高林庵を建てて玉室和尚を開山に迎えている。慈光院は臨濟宗の寺院で石州が両親を弔うために建立

した大徳寺派の末寺である。開山は玉室宗珀和尚ぎよくしゅうそうばんの法嗣玉舟宗璠和尚（大徳寺185世）である。石州と玉舟宗璠和尚は共に宗珀和尚に参禅した禅家の同門であった。

#### 4 石州流の伝承

芸能の伝達方法には「完全相伝」と「不完全相伝」があるという。石州流は社中・団体にあつて最も優れた弟子に免許権と教授権を同時に与える「完全相伝」である。「初めの十年は師のいう通りに、十年経ったら自分の茶事を。」といわれる。自らの感性と創意工夫で自分らしい茶事を要求される。そのため各自の感性と創意工夫によって新しい型が多数生まれることとなる。怡溪派いけい・清水派ちんしん・鎮信派いさ・不昧派ふまい等々同じ石州流てまえでも点前や型がかなり違う。これは家元制でない石州流の特徴である。

#### 5 市民と共に

新潟の秋の風物誌としてすっかり定着した新潟市民茶会は、昨年第60回の記念すべき年を迎えた。この市民茶会は昭和25年10月、まだ物資の乏しい殺伐とした復興期に「一碗のお茶で市民に和の心を！」をスローガンに、石州流いけいかい怡溪会が中心となって新潟の各流派・団体に呼び掛けて始まった。当初の参加団体は5団体であったが次第に増え、最盛期には74茶席が設けられた。昨年は10流派50団体が参加した。抹茶席と煎茶席計44席が用意され、約5,000人の市民が親しんだ。次の時代の担い手の高等学校・大学等の茶道部の参加が目立った。

（注1）小堀遠州：江戸前期の茶人・造園家。豊臣氏および徳川氏に仕え、作事奉行、伏見奉行を勤めた。遠州守であったので遠州と称す。茶道を古田織部に学び、遠州流を創め、徳川家光の茶道師範となる。

（注2）古田織部：安土桃山時代の茶人。茶道織部流の祖。千利休の高弟。初め豊

臣氏に仕えた。後に徳川氏に仕えて関が原の戦に功あり大名となる。徳川家の茶道師範と称されたが、後に陰謀を疑われ自刃。

(注3) 作事普請方：江戸幕府の職名。築城、寺社宮殿の造営、家屋・河道の修理などを担当する。

(注4) 道安：千道安。安土桃山時代の茶匠。千利休の長男。義弟少庵の柔に対して剛の茶といわれた。

(注5) 宗二：山<sup>やまのうえの</sup>上宗二。千利休の高弟。利休茶の湯の研究資料の白眉といわれる『山上宗二記』の著者。秀吉の意に逆らって殺されたという。

(注6) 利休：千利休。安土桃山時代の茶人。武野紹鷗に学び侘茶を完成し茶道の祖といわれる。織田信長、豊臣秀吉に仕え龍<sup>ちようぐう</sup>遇されたが、秀吉の怒りに触れ自刃。

(注7) 珠光：村田珠光。室町時代の茶湯者。大徳寺の一休に教えを乞い、禅味を加えた点茶法を始めた。侘び茶の祖といわれる。

(注8) 紹鷗：武野紹鷗。室町後期の茶人。泉州境の納屋衆の一人。珠光の門人に茶の湯を学び、侘び茶の骨格を作り利休に伝えた。

(注9) 塔頭：禅宗で一山中にある小寺院。大寺に所属する別坊。

## 参考文献

- |             |          |
|-------------|----------|
| 『石州流 歴史と系譜』 | 野村瑞典     |
| 『石州流茶道の原点』  | 中山素白     |
| 『石州三百箇条』    | 水戸何陋会    |
| 『石州流怡溪派の歴史』 | 茶道石州流怡溪会 |

## 著者プロフィール



小田守琮 (本名 / 秀和)

昭和14年、新潟県生まれ。新潟大学卒業。平成元年、人間禅芳賀洞然老師に入門。現在、人間禅補教師。茶道石州流怡溪会教授。

そ う ぼ う あ ん                      せ き あ い  
 雙峰庵山口夕靄老師  
 遺句抄

月光の松の緑のまぎれなし  
 満開の花の彼方の入り日かな  
 坐を解いて安らぐ耳はるつけどりに春告鳥（注1）  
 幽石おも忌憶ごとふが如く牡丹ぼたん咲き  
こけ苔むせる一茶の句碑や花の寺  
はぎ萩刈りて牡丹ぼたん畠ひに陽を入れぬ  
 この冬を掃き出すごとく落葉掃く  
 道友の訃報高鳴る虎落もがりぶえ笛  
 提唱の席に舞入る秋ちようの蝶  
はす蓮の花揺らして鳴くや牛蛙うしがえる  
 湯豆腐や酒酌み交す妻の居て  
 インディオの島の踊りや夏さか旺ん  
ひきがえる暮ひきがえる挨拶に出る夏の朝  
 秋明菊それぞれ夫々孤影ありにけり  
 秋天あしずりの足摺の海立ちつくす  
 幽石忌今年は牡丹二三輪  
 退院の妻を迎えし木瓜ぼけの花  
つぼ一壺の骨となる師や夏喝す  
 春惜む懐刀抱くごとし

あさもや  
朝靄に浮かぶ孤舟や画図に入る

(本稿は、齋藤<sup>さいとう</sup>徳治先生が採録されました「雙峰庵山口夕靄<sup>さいしき</sup>老師遺句百句」(『俳句と些子記』第14号所収)の中から、20句を紹介させていただきました。霧山<sup>らいざん</sup>選。)

編集部注

(注1) 春告鳥：鶯<sup>うぐいす</sup>の異称。

日本文化と禅

## 忘れ得ぬ言葉

山口 夕靄

誰しも過去において強い感銘を受けて、忘れることができなくなっている言葉を持っているものと思う。

私は、昭和15年7月初めて関東学生撰心会<sup>せっしんえ</sup>に参加して禅に機縁を得たのであるが、その年の10月入門を許されたものの、翌年3月には学校を卒業、北支に職を得て赴任することとなっていた。(中略)

終戦となり昭和20年12月北支から復員後、私は愛知県豊川市で家業である農業に従事していた。23年に至り、ビルマから兄も復員したので友人と共に事業を始め、当初順調に発展したが、24年暮れの不況の波にもろくも崩壊の憂き目にあい、25年の警察予備隊員の募集に応じ現在に至っている。

その間、昭和22年から再開された本部の撰心会には、豊川からリュ



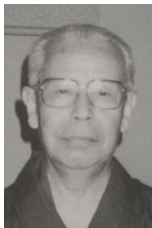
ックを背負って参加したのであるが、24年以降経済的理由や転勤等で32年4月の春季教団撰心会に参加するまで（千葉県習志野勤務となった1年半を除く。）道場から遠退とおのいていたのである。

その数年ぶりに参加した撰心会の第1日目のご提唱のとき、「団員は我が児のごとくにかわいい。特に足の遠退とおのいた団員の一人一人について、あいつはどうしているだろうか、こいつはどうしているだろうか、その消息を案じない日は一日とてない。」という老大師のお言葉があったのであるが、そのお言葉を耳にした瞬間 滂沱ぼうたとして流れ落ちる涙をどうすることもできなかった。（中略）

その間老大師にすら1通のお手紙も差し上げなかったのであるが、この青天の霹靂へきれきにも似て強烈な響きを持った老大師のお言葉から受けた感銘は、今なお生々しく、懈怠けたいを戒める心の鞭むちとなっている。

（『人間禅』55号より抄出。文責：編集部）

## 著者プロフィール



山口夕靄せきあい（本名／仁吉）

大正10年、愛知県生まれ。拓殖大学卒業。自衛官。昭和15年、両忘禅協会立田英山老師に入門。人間禅師家。庵号／雙峰庵そうぼうあん。平成22年9月14日帰寂。

ふ ろ さ き び ょ う ぶ  
風炉先屏風

立田 珠月

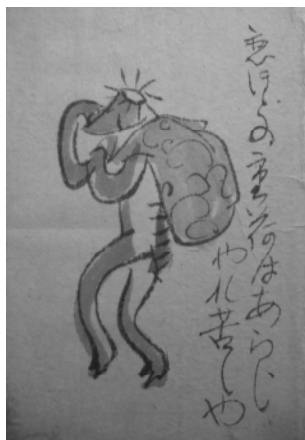


風炉先屏風(右面)



風炉先屏風(左面)

恋ほどの重荷はあらし  
やれ苦しや



なんぼ恋には身か細ろ  
二重の帯が三重回る

思ひくらべん  
こいこいほたる  
(注1)





月を伏見の  
草まくら



うた  
唄へや唄へやうたかたの  
小舟つくりてお夏をのせて  
花の清十郎にこがせたや

(注2)

## 編集部注

この風炉先屏風は、洗心庵珠月老禅子がお作りになったものである。戦争中にご主人を亡くされた、ご次女の洗涯庵緑水老禅子を慰めるためにお作りになったのであろうか。濃紺の和紙で縁取りされた屏風には、恋し合う2匹の河童の姿が描かれている。河童の肌は薄茶色。

風炉先屏風は、当初一行庵義堂老師が洗涯庵老禅子から頂かれ、その後熊本道場にご寄贈いただいたものである。

(注1) 恋の蛸：恋いこがれる思いを蛸の火にたとえていう。

(注2) うたかた：<sup>うたかた</sup>泡沫。水に浮かぶあわ。はかなく消えやすいことのたとえに使う。

お夏清十郎：姫路の宿屋<sup>たじま</sup>但馬屋の娘お夏と手代清十郎とが駆け落ちしようとして捕えられ、その上金子紛失の嫌疑で清十郎は死刑、お夏は恋しさのあまり発狂したという事件を題材にした作品の通称。井原西鶴の『好色五人女』、近松門左衛門の浄瑠璃『五十年忌歌念仏』、坪内逍遙の舞踊劇『お夏狂乱』などの作品がある。

「清十郎殺さばお夏も殺せ。」向う通るは清十郎じゃないか、<sup>かさ</sup>笠がよく似た<sup>すげ</sup>菅笠が。」など、二人の悲恋は多数のはやり歌にうたわれた。

## 著者プロフィール



立田珠月（本名／ヨリ）

明治28年生まれ。人間禅第一世総裁耕雲庵立田英山老師のご令室。大正8年、釈宗活老師に入門。有楽流家元。俳号／紫葉。庵号／洗心庵。昭和52年帰寂。